

リス語比較研究 I

西 田 龍 雄

A comparative study of the Lisu language (Tak dialect) I

by

Tatsuo NISHIDA

ま え が き

いままで全く記録されていない言葉あるいは記録されていてもよくわからなかった言葉を対象とするとき、普通二つの仕事が必要になる。まず、その言葉の体系がどうであるかを記述することと、つぎに記述された体系がそのほかの言葉、とくに系統的に近い言葉とどのような関係をもつかを検討する、この二つである。¹⁾ タークのリス語に関して、私はさきに「リス語の研究」と題する一文を、本誌5巻2号に提出したが、本稿はそれを補うとともに、いま一つの研究面、同系諸言語との比較研究を試みたいと思う。

I リス語とビルマ・ロロ諸語

前稿「ビス語の系統」²⁾において、私は言葉の比較研究を二つの面から考察した。まず推定した共通態の体系と、対象とする言葉の体系あるいは対象とする二つ以上の言葉の体系相互間を、連続する二つ（あるいはそれ以上）の発展段階と見なして、その体系間の対応関係がどのようなになっているかを考察した。そして、その代表的なタイプ三つをあげた。

タイプ1は、あとの時代の言葉の体系の一部がより古い段階の言葉の体系の一部をそのまま受け継いでいるタイプである。

earlier stage	a	b	c	d
	↓	↓	↓	↓
later stage, language A	a	b	c	d
language B	a	b	c	d

1) 拙稿「タイ国北部の言語調査について」『東南アジア研究』第3巻第3号(1965), とくに p. 128- を参照。

2) 『東南アジア研究』第4巻第3号(1966)。

あとの段階の諸言語が並行して、共通態の形式、とくに関連した意味を分担する一対の形式を、そのまま受け継いでいるときは、それらの言葉相互の親近性は非常につよい。その例として、ビス語・アカ語・ビルマ語の“ear”（もの）と“to listen”（はたらき），“to fall”（自動）と“to drop”（他動）をあげたが、これにあたるリス語（およびラフ語）の形式は、つぎのようである。³⁾

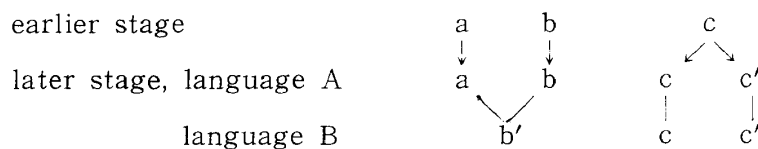
	“ear”	“to listen”	“to fall”	“to drop”
earlier stage	*na ²	*hna-hu	*gla-hu	*khla-hu
Lisu	náh poh	(náh-) nah-ʔah	kje-ʔah	khje-ʔah
Lahu Shi	nàh pǝ	náh-ve	tséh-ve	tshéh-ve
Lahu Na	nàh pǝ	náh-lu	tseh-lu	tsheh-lu

リス語（とラフ語）も、アカ語・ビス語・ビルマ語とよく並行していて、これらはいずれもタイプ1の形態素といえる。これに対して、アカ語・ビス語・ビルマ語で同じ条件をもっていた“大きい”と“小さい”，“多い”と“少ない”は，⁴⁾

	“big”	“small”	“many”	“few”
earlier stage	-hù	-ñí	-mjá	-ní
Lisu	ʔùh-ʔah	ní-ʔah	ʔah-miáh-ʔah	×
Lahu Shi	ʔih-ve	jih-ve	mah-ve	×
Lahu Na	ʔúh-ah	jih-ah	×	×

となって，“大きい”“小さい”は並行するが，あとの例はそうではない。リス語・ラフ・シ語では“少ない”が，ラフ・ナ語では“多い”も“少ない”も共に別の形式に入れ替わっている。この点ではビス語・アカ語・ビルマ語と，リス語・ラフ語の間に一線を引き得ることになる。

タイプ2として，共通態における対立関係の均衡が破れて，あとの段階では，それらが融合または分裂して受け継がれていく場合がある。



さきに融合の例として，“to come”をあげた。それにリス語およびラフ語の形式を加える

3) このラフ・シ語 (Maechan) およびラフ・ナ語 (Tak) は、私が調査した資料を用いた。なお、ここで使うロロ語の資料は拙稿「ビルマ語とロロ諸語」『東南アジア研究』第4号 (1964) であげた。

4) Akha 語, Bisu 語, Bur. の形は, 上掲「タイ国北部の言語調査について」p. 128 を見られたい。なお×印は, それに対応する形が, ほかの形式と入れ替わっていることを示す。たとえば Lisu “few” は ah-tih-ʔah である。

と、つぎのようになる。

“to come”	form ₁	form ₂	form ₁ (from the north)
earlier stage	*lú-hu	*lá-hu	form ₂ (from the south)
Bisu	lú-ɲe	lá-ɲe	
Lisu	lih-ʔah	láh-ʔah	
Akha	? ⁵⁾	lá-fiw	
Lahu Shi		lâh-ve	
Lahu Na		lâh-lu	

リス語の“来る”にも2形式があって、ビス語とよく並行しているが、ラフ語では、それらが、一つの形式に融合した。それゆえ、ラフ語の lâh-ve は、リス語の lách-ʔah と形式の上ではよく一致するけれども、厳密にいうと、ラフ語には対立する form₁ が存在しないから、この両者は同じ職能をもっていない。

分裂の例には、音素 l- をあげよう。あとで述べるように、分裂の条件はよくわからないが、共通態の *l- はリス語では l- と h- とに分かれた。

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Akha
“hand” *lak	læ-phǎh	lâ-kóh	lâ-kóh	là-lo
“wind” *liy	muh-ŋih	mǎh-hòh	m-hoh	dža-lé

このほかりス語には *hl- から変化した h- があり、ラフ語の h- に対応する。

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Akha
“moon” *hla	hah-bah	hâh-páh	hâh-páh	bà-la

このリス語とラフ語の関係を書き改めると下のようになる。はじめの例 “to come” については、リス語はラフ語と並行しないでビス語に近いが、あとの例音素 l- ではリス語はビス語とは離れて、ラフ語に近い。

earlier stage		c(l)	d(hl)
Lisu		c(l)	c'(h)
Lahu		c(l)	d(h)

タイプ3として、のちの段階で共通態形式がほかの形式（借用語を含む）と置き換えられる場合をあげた。そこで例とした “to go” は、

5) form₁ にあたるアカ語形 lú-fiw の存在は、十分に予想できる。

“to go”	form ₁	form ₂
earlier stage	*ʔé-huɪ	*lé-huɪ
Bisu	ʔé-ŋɛ	lé-ŋɛ
Akha	ʔi-fiɪ	lí-fiɪ
Lisu	je-ʔah	gi-ʔah
Lahu Shi		kài-ve
Lahu Na		kài-luɪ

となつて、リス語では form₂ が別の形式に置き換えられ (?), ラフ語では共通態の 2 形式が共に kài に入れ替わっている。⁶⁾ これに対して、いま一つの例 “to tie” と “to untie” は、リス語も (ラフ語も)、ビス語と並行して、声調の対立によって弁別された一対の形式をよく保存している。

	“to tie”	“to untie”
earlier stage	*phrù-huɪ	*phrú-huɪ
Lisu	phǎh-ɣuɪh	phɤh-ɣuɪh
Lahu Shi	phèh-ve	phéh-ve
Lahu Na	phéh-luɪ	phèh-luɪ

さらに、“銀”と“白”、“金”と“黄”の事物と属性の関係にある一対の形式も、リス語 (とラフ語) は、他の形式と入れ替わることがなく、共通態形式をよく保存する。

	“silver” “white”	“gold” “yellow”
Lisu	phuh = jǐh phuh	ši = jǐh ši
Lahu Shi	phuh = ô-phuh	sìh = ô-sìh
Lahu Na	phuh = ô-phuh	sìh = ô-sìh

この事実、リス語が、ビス語・アカ語に比べて、ラフ語により近いことを示している。そのうえ、リス語とラフ語が“白い”“黄色い”をつぎのように表現する点でもまったく並行する。

- 6) あるいはリス語 gi-ʔah, ラフ語 kài は、いずれも同源形式であり、form₂ の共通形は *glɛ ~ gla (?) であったことを示すのであろうか (cf. Tibetan hgro-ba)。なおビルマの Maru 語にも、2 形式の対立を考え得る。私が調査した Mitkyina の方言では “to go” は ló- であったが、Bhamo の東南方にある Mang-wing の方言では jé-wa という形があった。このことから、Maru 語にも (おそらく Lashi 語にも) jé-wa と ló-wa の対立があって、それがこの form₁ と form₂ に対応するものと考えられる。

	Maru I	Maru II	Lashi
form ₁	*jé-wa	jé-wa	jé-
form ₂	ló-wa	ló-wa	lo-

	“to be white”	“to be yellow”
Lisu	jǐh puh puh-ʔah	jǐn ših ših-ʔah
Lahu Na	ô-phuh puh-e-ve ⁷⁾	ô-sih síh-e-ve

最後に、直接には結びつかない形、ビス語 tsuŋ-tsuŋ とアカ語 ʔa-bó が、ビルマ語形 sətš-paŋ を媒介として、対応関係がわかる “tree” の例をあげた。これに対する リス語形は sũh-dzuu であり、ラフ語 sš-tse ともっとも近い。

“tree”	*tsæñ-
Lisu	sũh-dzuu
Lahu Shi	sš-tse
Lahu Na	sũ-tse
Bur.	sac < sətš
Bisu	tsuŋ

このリス語 sũh-, ラフ語 sš-sũ- は、共通態の *tsæñ- にあたる。しかし、あとの形態素 -dzuu, -tse が *tsæñ- *baŋ- につぐ、第三の語幹を代表するのかどうかは今の段階ではわからない。⁸⁾

以上の考察は、いわば通時的な観点を主にした考察であった。これに対していま一つの観点は、同じ共通態から来源した二つ以上の言葉の相互関係に重点をおく。この相互関係は、いろいろの面で扱うことができるが、対象とする言葉の特定の形態素が、ほかの親属言語にも分布しているかどうか、そして、それらが、共通態の同じ形式に遡れるか否かによって、i) 同源形式, ii) 異源形式, iii) 同源異語幹形式の三つに分けることができる。⁹⁾ かりに、同系統の任意の二つの言語の形態素をすべて比較したとすると、それらの形態素は、この三つの形式のいずれかに属することになる。言うまでもなく、言葉の比較にあたって、もっとも重要な証明力の大きい研究対象としてとり上げるのは、普通は、この中の同源形式である。

二つ以上の言葉、A語B語C語……などが同源形式を保っていると認め得るのは、それらの言葉の形態素の間に、対応通則が成立することによる。たとえば、A語の -a : B語の -a : C語の -a が規則的に対応するといった rule である。もし、このような通則が認められないとすれば、それらを異源形式としなければならない。したがって、これらの rules を設定する操作は、同時に通則の適用範囲をも定めることになる。しかし、ここで言う適用範囲には、実際には二つの意味が含まれている。第1は当該 rule を適用できる言葉の範囲、すなわち極端に

7) この -e- は動詞語幹と動詞 suffix-ve に介在して、ある状態を示す suffix である。

8) リス語は、一般にラフ語と近いけれども、一方でラフ語系でないことを特徴づける単語形式もある。

たとえば “salt” がそうである。Lisu tshà-bo, Akha sà-dx, Bisu tso-me, Bur. tsha² に対して Lahu 語は Shi a-léh, Na a-lèh で特徴づけられる。このラフ語形は, “to lick” Shi lê-ve, Na lê-lu と関係する。なお “sugar” は Lahu 語では a lèh mèh <甘い塩> と表現される。

9) 拙稿「ビス語の系統(続)」『東南アジア研究』第4巻第5号(1967), p.854-参照

言えば rule X はA語B語C語に適用できるが、rule Y は、A語、C語にのみ適用できて、B語には適用できないといった範囲である。

	A language		B language		C language
1. Rule X	-a	:	-a	:	-a
Rule Y	-i	:	×	:	-i

換言すると、B語には rule Y によって見つけ出せる同源形式がまったく存在しない場合がある。しかし、このような極端な場合はむしろ少なく、A、B言語のこの rule にあてはまる大部分の形態素は、B言語にはないが、ごく少数の形態素は対応形をもっているのが普通である。

	A language		B language		C language
2. Rule Y	-i	:	$\left\{ \begin{array}{l} -i \text{ (少数の形態素)} \\ \times \text{ (大部分の形態素)} \end{array} \right\}$	:	-i

したがって通則の適用範囲からみると、同じ言語グループで保たれる同源形式といっても、極めて普遍的に分布しているものと、ごく限られた範囲にしか分布しないものが出てくる。さらに、この適用範囲にはいま一つの限定がある。それが第2の意味の適用範囲である。Rule X は、A語 -a, B語 -a, C語 -a という明瞭な対応関係をもつが、これがA語の -a 形式のすべてにはたらくのではなく、-a 形式の中の若干の形態素には、別の rule Z が適用されるという限定である。

	A language		B language		C language
3. Rule X	-a		-a		-a
Rule Z	-a		-e		-a

これも言葉の比較にあたって極めて重要な事柄である。この場合、rule X と Z は補い合うかあるいは対立するかのいずれかであり、対立するのであれば、rule X とは別の共通形式を設定しなければならない。

はじめの観点は、言語グループ内の subgrouping の問題になり、あとの観点は主に基本対応通則に対する subrules を設定すべきか否かの問題になる。

ここで具体的な例をあげよう。“to eat”を意味する単語は、この言語グループでは、つぎのような対応関係を示していて、その主核になる形態素は、代表的な同源形式の一つであるといえる。

Lahu Shi	tsáh-ve :	Lahu Na	tsàh-lu :	Akha	dzà-fiur
Maru	tsó- :	Bur.	tša ² -se :	Lisu	dzà-ʔah
Lashi	tsó- :	Bisu	tsà-ŋe :	Nyilolo	dzà

この対応関係について、まず目立った三つの特徴を指摘できる。

- 1) Lahu Shi, Lahu Na, Bur., Maru, Lashi, Bisu 語の voiceless initial に対する Akha, Lisu, Nyilolo 語の voiced initial
- 2) Lahu Shi, Lahu Na, Bur., Bisu, Akha, Lisu, Nyilolo 語の -a に対する Maru, Lashi 語の -o
- 3) Lahu Shi, Bur., Maru, Lashi 語の high tone に対する Lahu Na, Bisu, Akha, Lisu 語の low tone

これを表にすると、つぎのようになる。

	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.	Maru	Lashi	Bisu	Akha	Lisu	Nyilolo
voiced (+) : voiceless (-)	-	-	-	-	-	-	+	+	+
-a (+) : -o (-)	+	+	+	-	-	+	+	+	+
hightone (+) : low tone (-)	+	-	+	+	+	-	-	-	-

この同源形式は、これらの言葉のすべてに分布していて、この形態素に関する限り、音素形式に同じ特徴をもつ四つの subgroup, (1) Lahu Shi と Bur., (2) Lahu Na と Bisu, (3) Maru と Lashi, (4) Akha と Lisu と Nyilolo とができることになる。これと並行した 関係を示す形態素は、そのほかにもある。

	“to be thin”	“cheek”	“to ride” ¹⁰⁾
Lahu Shi	páh-ve	páh-lö	tsíh-ve
Lahu Na	pàh-a	pàh	tsih-lu
Bur.	pa ² -se	pa ²	tši ² -se
Maru	pó-	pó-Rèu	dzý-
Lashi	pó-	pó-jàm	dzý-
Bisu	ʔaŋ-pà	pà-pa	×
Akha	jo-bà	bà-ba	×
Lisu	bàh-ʔah	bàh-buh	dzù-ʔah
Nyilolo	?	bà-pá	×

したがって、これらの対応関係は、通則として認めて差し支えない。ところがこの通則をそのまま適用できない形式が出てくる。たとえば“frog”がそうである。

Lahu Shi	páh	Maru	pó-hàun	Akha	xà phà
Lahu Na	pàh-káh	Lashi	pó-xòun	Lisu	uó-pá
Bur.	pha ²	Bisu	kop nà	Thai	Nyilolo pá

さきの母音の対応に関する rule はここにも適用できるが、初頭子音と声調については、さきとは別の対応関係が認められる。

- 1) Lahu Shi, Lahu Na, Maru, Lashi, Lisu, Nyilolo 語の voiceless unaspirated : Bur., Akha 語の voiceless aspirated
- 3) Lahu Shi, Bur., Maru, Lashi, Lisu, Nyilolo 語の high tone : Lahu Na, Akha 語の low tone

これらも果たして、通則とできるか、あるいはさきの通則の subrules とすべきかは、他の並行例を求めて検討しなければならない。しかし、この対応関係に根拠をおいても、さきの subgroup はだいたい支持されることになるが¹¹⁾、言語間の subgrouping の問題は、対応関係を詳細に検討すればするほど、非常に複雑なものになって、その分割に決定的な根拠を見出し難くなるのが常である。この事情は、単語構成を考慮するといっそう厄介になる。さきにあげた“to come”はこれらの言葉のすべてに共通した形式をもっていて、その単語の構成法も言語間によく並行していた。ところが“tiger”の場合は少し事情が違っている。

- 10) “to ride”は、声調で上述の rule と合致し、母音の対応は、

Lahu Shi	Lahu Na	Bur.	Maru	Lashi	Lisu
-i	-i	-i	-y	-y	-u

の別の rule と合っているから、これを同源形式と認め得るが、Maru, Lashi が初頭に有声音をもつところが“to eat”と異なる。これには subrule が成立するであろう。そして、この形式は、ビス語、アカ語、ロロ語には保存されていない。

- 11) “frog”の対応関係をさきと同じ方法で分解すると、つぎのようになる。

	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.	Maru	Lashi	Bisu	Akha	Lisu	Nyilolo
vl. unasp. (-): vl. asp. (+)	-	-	+	-	-	×	+	-	-
-a (+): -o (-)	+	+	+	-	-	×	+	+	+
hightone (+): lowtone (-)	-	-	+	+	+	×	-	+	+

ラフ・シ語とビルマ語が並行しないことと、アカ語がリス語、ニ・ロロ語から分かれる点異なる。

	“tiger”	“to come”
Lahu Shi	tsâh- méh	lâh-ve
Lahu Na	lâh	lâh-lu
Bur.	kya ² < kla ²	la-se
Maru	tsó-ló	lò
Lashi	tsó-ló	lò
Bisu	tshà-là	lá-ŋe
Akha	xà-là	lá-fiw
Lisu	lâh-ma	lah-ʔah
Nyilolo	lá	(li)

“tiger” la の対応関係は、ラフ・シ語に 同源形式を 欠くほかは、“to come” とともに、子音・母音の対応通則によく一致しているが¹²⁾、具体的に “tiger” という 単語を 構成する方法が、言語間で独自の態度を示している。これは “tiger” には、おそらく共通形式に dzà~tshà¹³⁾ と lá の 2 形式があって、その組み合わせ方がそれぞれで異なっていたと考えてよいであろう。このように、単語構成の方法と関連して同源形式の分布を考えることは、将来重要な問題になるにちがいないが、それとともに、いま一つ検討すべきより複雑な事柄がある。

さきにあげた基本単語 “to eat” の主核形態素 *dza- はここで対象とした言葉のすべてに分布していた。すると、これと関連する “食べるもの” の代表 “飯” がどのような形であらわされているか、そして、さらに “飯をたく” がどのような形で表現されるかもさぐる必要が出てくる。換言すると、これらの言葉で “to eat” は同源形式であったが、それと意味的に密接な関連をもつ “boiled rice” とか “to boil rice” も果たして、同源形式をもつのだろうかとも検討すべき事実になる。もし、それらも同源形式であらわされるとすれば、これらの言葉は、いっそう密接な関係にあることが証明される。

“boiled rice”			
Lahu Shi	ʔòh	Bisu	hàn
Lahu Na	ʔòh	Lisu	dzah
Akha	ho	Bur.	thamaŋ ² , a-tša “food”

12) “虎” の la と “来る” の la は前者が無声初頭音の声調をとり、後者が有声初頭音の声調をとる点で対立する。

13) この *dzà は、上述の “to eat” dzà- の対応関係とだいたい並行するが、ビス語で出気音である点で違っている。この単語は、おそらく、“食べる虎” と表現されたのであろう。アカ語の xà- は xà mm “a bear”, xà dzé “hawk” などと共通する動物名に冠せられる接頭辞であって、*dzà~tshà とは別の形態素である。

“boiled rice” には Lahu, Akha, Bisu 語の *haŋ と Lisu, Bur. の dza の 2 形式が分布して、二つのグループに分かれる。

“to boil rice”

Lahu Shi	tsàh-ve	Bisu	hàŋ tsùŋ tsùŋ-ŋɛ
Lahu Na	tsáh-lu	Lisu	dzah kjah-ʔah
Akha	pù-fiu	Bur.	prut-se

“to boil rice” には Lahu 語 tsa-, Lisu 語 kjah-; Bisu tsùŋ と Bur., Akha prut- が分布して、三つのグループに分かれる。“炊く”には炊き方の違いからくる数種類もの形式があって、各言語でその中のどれをもっともよく使ったかによって、この相違が出来たのであろう。

“食べる”, “飯”, “飯を炊く”の意味分野で関連する三つの形態素は、またいかなる音素形式で分割されているか、その分割方法を類型的にさぐることができる。

	Lahu Shi	Lahu Na	Lisu	Akha	Bisu	Bur.
a. to eat	tsáh-ve	tsàh-lu	dzàh-ʔah	dzà-fiu	tsà-ŋɛ	tša²-se
b. to boil rice	tsàh-ve	tsáh-lu	kjah-ʔàh	pù-fiu	tsùŋ-ŋɛ	prut-se
c. boiled rice	ʔòh	ʔòh	dzah	ho	hàŋ	a-tša
	a≡b:c	a≡b:c	a≡b≡c	a:b:c	a:b:c	a≡c:b

各言語は、それぞれ独自の方法を示していて、これらの言葉は“to eat”の対応関係から予想できるほど相互に密接ではないことがわかる。a, b, c がもっとも近い形式で分割されている順序にこれらの言葉を並べると、Lisu—Lahu・Bur.—Bisu・Akha になる。

以上のような検討は、極めて厄介な仕事ではあるが、各言語の性格を知る上で重要な手続であると思う。

II 異源語形式——借用語について

さて、リス語には異源語の形式がかなり多い。たとえば“to rub” Bur. khyei-de < khyiy-se, : Bisu khji-ŋɛ, : Akha dži-fiu に対して、リス語は tshàh-ʔah であり、“duck” Bur. wam²-bay : Akha bè : Lahu Shi a-pèh に対して、リス語は ʔəh である。これらの異源語の中で、もっとも明瞭につかまえ得るのは、近隣言語からの借用語である。上にあげた“to rub” “duck”の 2 形式も実は借用語であって、もともとは同系言語と同源の形式をもった形態素が、ある段階で漢語の擦 tsha および鴨 ia から借り入れた形式に入れ替わったものと考えられる。

このリス族が長い距離を移動してタークに定着する過程において、このような単語の置き換えや新しい文化との接触にともなう単語の受け入れによって、次第に語彙を増加してきたことは想像に難くない。私が記録した約1500語の中で、70語～80語が借用語である。

借用の時期については、つぎの三つの大まかな段階を設定できると思う。

まず雲南において、漢語からもっとも多くの単語を借用した。これが一番古い層の借用であろう。この借用語の形式には、もとの形をあまり変えていない特徴がある。これはリス族が漢民族との接触がもっとも久しかったことを意味する。¹⁴⁾ そして、たとえばマッチなどの単語もビルマ語やタイ語を使わないで漢語からの借用語であらわすところを見ると、この部族はかなり最近まで雲南の土地にいたのであろう。

第二の時期として考えられるのは、ビルマ語からの借用語である。しかし、これは意外に少ない。この事実は、このリス族がビルマのカチン州あるいはシャン州の地にあまり永くいなかったことによるとともに、ビルマ語からの借用語であっても、それが借用形式か同源形式かを決定し難い事情にもよっている。最後に第三の時期として、タイ国北部でタイ語から借り入れた単語がある。学校とか先生とかペンとかいった単語はすべてタイ語を使う。この数も少ないほうではない。

この三つの時期を通じて借用された単語はリス語に受け入れられた形式からみると、つぎの三つのタイプに分けられる。

- 1) もとの言葉の単語形式をもとのまま受け入れている単語。
- 2) 借り入れた単語を、リス語的に改めている単語。
- 3) 借用語をリス語の形態素と結び付けて、新しい複合形式を作っている単語。

リス語における借用語には、このうち第一のタイプがもっとも多く、第二のタイプは非常に少ない。

A. 漢語からの借用語

漢語から借用した単語の形式は、雲南省の漢語とくにその代表である昆明の漢語に近い。おそらく、この部族は、はじめは昆明付近にいて、そこからビルマを通してタイ国北部に移動して来たのであろう。この考えは、対応関係とくに声調の対応関係が昆明の漢語とリス語の間で、かなりはっきりと一致している点にある。北京語の四つの声調は、昆明では、つぎの左側にあげた型をとる。¹⁵⁾ この各声調型は、リス語では、その右側にあげた型で受け入れられている。

漢語	1. 陰平調	昆明	33	リス語	中平型
	2. 陽平調		31		低平型
	3. 上声調		53		低平型
	4. 去声調		13		上昇型または高平型

14) しかし、十二支は、本来のリス語形で表現し (cf. 拙稿「リス語の研究」『東南アジア研究』第5巻第2号 p. 73), ビス語や雲南のタイ語、パイ・イ語などのように、漢語からの借用語を使っていない。

15) 北京大学中国語文学系言語学教研室編『漢語方言詞彙』(北京, 1964) および袁家驊等著『漢語方言概要』(北京, 1960) による。

つぎに、この声調の対応関係を基準に借用語例をあげてみたい。

1. リス語中平型：漢語 陰平調

- tshun “onion” : 葱 ts’oŋ⁴⁴
 fùh kjao “pepper” : 胡椒 xu³¹ tɕiau⁴⁴
 jàn ko “pot” : 洋鍋 iā³¹ kuo⁴⁴
 tshàh kuan “kettle” : 茶罐 ts’a³¹ kuā⁴⁴
 khjih an “saddle” : 騎鞍 tɕ’i³¹ ā⁴⁴
 koh-kòh “elder brother” : 哥哥 kuo⁴⁴ kuo⁴⁴
 šah tsù “lobster” : 蝦子 ɕia⁴⁴ tsɿ⁵³
 sũh fan “square” : 四方 sɿ¹³ fā⁴⁴
 kae tsù “market” : 街子 kɛ⁴⁴ tsɿ⁵³
 jàh pah “a dumb” : 啞吧 ia⁵³ pa⁴⁴
 ʔu kue “tortoise” : 烏龜 u⁴⁴ kue⁴⁴
 sũh xua “to like” : 喜歡 ɕi⁵³ xuā⁴⁴
 phien ʔi-ʔah “to be cheap” : 便宜 p’ian⁴⁴ i³¹ (-ʔah は本来のリス語)
 jĩh kan “liver” : 肝 kan⁴⁴ (jĩh- は本来のリス語)

2. リス語低平型：漢語 陽平調

- tshàh jěh “tea” : 茶液(?)¹⁶⁾ tɕa³¹ ie¹³
 jan fùh “bottle” : 洋壺 iā xu³¹
 lòh thin “ladder” : 樓梯 ləu³¹ t’i⁴⁴
 liàn “to be cool” : 涼 liā³¹
 thìn tsù “hoof” : 蹄子 t’i³¹ tsɿ⁵³
 ʔəh “duck” : 鴨 ia³¹ tsɿ⁵³
 fùh lùh “gourd” : 葫蘆 xu³¹ lu³¹
 tsòh tsu “table” : 桌子 tɕuo³¹ tsɿ⁵³
 tshàh-ʔah “to rub” : 擦 ts’a³¹ (-ʔah は本来のリス語)
 cf. 上掲 “pepper” “saddle”

3. リス語低平型：漢語 上声調

- sàh “umbrella” : 傘 sã⁵³
 kùh “a drum” : 鼓 ku⁵³

16) この jěh には、かりに液をあてたが、ビルマ語 laphak-rañ/lapheje/ の -rañ<-ræfi と同源形式である可能性も考えられる。茶葉ではない。

phih síh “buttock” : 屁 □ p'i 53 (-síh はリス語?)

lõh sùe “a drop” : 露水 lu 13 sue 53

jõh tsìn “to be important” : 要緊 iau 13 tçi 53

kje kjè “elder sister” : 姐姐 tçi 53 tçi 53

?è ?è-?ah “to be low” : 矮 ε 53

hòh pàn “torch” : 火把 xuo 53 pa 53

hòh thă “charcoal” : 火炭 xuo 53 t'ā 13

ja hòh “match” : 洋火 iā 31 xuo 53

cf. 上掲 “a dumb”, “to like”

4. リス語上昇型 高平型 : 漢語 去声調

văh tsu “socks” : 襪子 ua 13 tsɿ 53

lăh tsu “chili” : 辣子 la 13 tsɿ 53

lăh suán “garlic” : 辣蒜 la 13 suā 13

kúe-?ah “to be dear” : 貴 kue 13

lián “to be bright” : 亮 liā 13

pàh tǎh “chair” : 板凳 pā 53 tē 13

thèh wán “ten thousand” : 一萬 uā 13 (thèh はリス語 “I”)

cf. 上掲 “tea”, “to be important”, “square”, “a drop”

漢語からの借用語には、一見して、それと気付かないのがある。さきにあげた “to rub” がそうである。この種の単語は同系言語の形式と比べてはじめて借用語であることがわかる。同じように、“to be straight” Lisu tsý tsý le kǎh が漢語 直 tsɿ 31 からの借用語ではないかと疑えるのは、つぎのような対照によってである。(-le kǎh は本来のリス語構成)

“to be straight”

	*dan-	*phrɔŋ-
Lahu Shi	ô théh léh	?
Lahu Na	thih-e-ve	?
Bur.	tañ³-se	phrɔŋ³-se
Akha	jo-do	?
Bisu	×	?aŋ-plɔŋ

このほか、思わない形式が漢語からの借用語ではないかと疑える。

“frog” uo-pá この uo は漢語 蛙 ua 44 からの借用語

“trap” jǐh-ua この ua は漢語 網 uā からの借用語か?

- “to paint” jàŋ sǔh núh-ʔah この jàŋ sǔh は漢語 顔色からの借用語
 “to move” thǒŋ ja-ʔah この thǒŋ は漢語 動よりの借用語か？
 “a cover” jǐh kae この kae は、漢語 蓋(子)よりの借用語か？¹⁷⁾

より不確定な単語として、つぎの形式がある。

- “hot season” kan thih thè この kan は漢語 干よりの借用語？
 “rainy season” jǐh sùe thih thè この jǐh sùe は漢語 雨水よりの借用語？
 “sharpener” sòh dùh この sòh は漢語 削よりの借用語 (-dùh 道具を示す本来のリス語)
 “throat” sǎn kue これは漢語 喉咳(?)よりの借用語

親近言語に対応形をもたない単語は、とくに借用語である蓋然性が極めて大きいといえる。

B. ビルマ語からの借用語

さきに述べたように、ビルマ語とリス語は系統的にかなり近い関係にあるために、同源語が双方に保存されているのかあるいはビルマ語からの借用語なのかは、決定し難い。たとえば，“to show” Lisu piah-ŋùh は Bur. pya-se に，“to be enough” lõh-ʔah は Bur. lók-se に “picture” jǐh phòŋ は Bur. pum にそれぞれあたる。これらの -ŋùh, -ʔah, jǐh- は、いずれもリス語本来の形態素である。これらの単語が借用語であるという決め手はない。それに対して、かなりはっきりと借用語と断定できる形式もある。měi di-ʔah “to forget” の měi- はビルマ語の mei³ < miy³ と関係するが、ビルマ語形との間にたて得る 母音対応の通則と合わないから、これは借用語と決定してよさそうである。しかし、このような例は極めて少ない。

C. タイ語からの借用語

タイ語からの借用語は、主に北方タイ語によっている。そして、漢語ほどではないけれども、かなり多数の単語が借り入れられ、これからさき、ますます増加していくにちがいない。つぎに代表的な例を列举しよう。

“shop” Lisu lán : N. TH. lâ an, “money” sàtan : N. TH. sàtaŋ, “chief” huǎh-nàh : N. TH. hǎnā, “province” tsǎŋ và : N. TH. cǎgwát, “doctor” mǒh : N. TH. mǒ, “teacher” khuh : N. TH. khuu., “school” lon liàn : N. TH. hoŋ hian, TH. roŋ rian, “pen” pà káh : N. TH. pàak kǎ, “pencil” lin sǒh : N. TH. dǐnsǒ, “foreign” fáh làn : N. TH. fálàŋ, “glass” keh-ʔòh : N. TH. kēew, “saw” le luh-ah : N. TH. lék, lýa, “to plough” thǎi : N. TH. thǎj,

17) この形式には、Bisu tù kap “a cover”, Bur. kap-se “to adhere” があたって、あるいは借用語でないかもわからない。

“crocodile” tsah kheh-ʔèh: TH. cōrakhêe,¹⁸⁾ “flag” jǐh thón: N. TH. thǒŋ.

このリス語が借り入れた単語には、漢語から来たものと、タイ語から来たものは、明瞭に分けることができるが、後者の中には、一時は、漢語からの借用語で表現していたものを、さらにタイ語形に入れ替えた単語も含まれている。

Fraser の記録した騰越周辺のリス語では、“glass”は paw³-li⁵, “pen”は pi² である。¹⁹⁾ これらが漢語の玻璃および筆から借用された単語であることは疑い得ない。このタークのリス族もおそらくは、はじめは paw-li, pi を借用したが、タイ国に入ってから北方タイ語の kĕew および pàak kǎ にそれを置き換えたものと思われる。すなわち、

(同源形式) → 漢語からの借用語
↓
タイ語からの借用語

上述のような借用語相互の入れ替わりでなくとも、この3者の関係は、この言語グループ一般について認められる。たとえば“gourd”は、Akha ʔí phù: Lahu Na jǐh phùh: Bur. phu² と、3言語は共通形式 phu をもっているが、リス語は漢語から借りた fùh lùh を(雲南のリス語は hu⁵-lu⁴,) ラフ・シ語はタイ語 nam tâw から借り入れた nâh tàò を使う。²⁰⁾すなわち、

*phu → phù (Akha, Lahu Na, Bur.)
fùh lùh (Lisu) ← Chinese
nâh tàò (Lahu Shi) ← Thai

このような語彙の借用は、これらの言葉の発展に重要な役割を果たしたことは事実であるけれども、同源形式の置き換えが、この言語グループの相互関係を、より不明瞭にしていることも確かである。

Ⅲ 子音体系の比較研究

私は、さきの論文「ビス語の系統」および「ビス語の系統(続)」で、ビス語・アカ語・ビルマ語について考え得る基本通則を提出したが、それにリス語の対応形を加えて、果たして四つの言語の対応通則を認定することが可能であるかどうかをつぎに検討したい。

リス語の場合にも、ある音素については、ビルマ語との間に非常にはっきりとした対応通則を発見できる。たとえば、リス語の dz-, tsh- とビルマ語の kr-, ky-, khr-, khy- の対応とかりス語の -œ とビルマ語の -am, -um, -up の対応がそれである。

18) cf. 前掲「リス語の研究」p. 281.

19) F.O. Fraser, *Handbook of the Lisu (Yawyin) Language*, Rangoon, 1922.

20) ビス語で“bladder”を jì shì lí phùh という。この lí phùh が“ひょうたん”にあたる(jì shì は“尿”)。リス語では、“膀胱”は、zūh phúh であるから(zūh は“尿”)、リス語は、複合語で本来の phúh 形式を保存しているといえる。

さきに, “to hear” には Akha gà lá-fiw, Bisu kjà-ŋɛ, Bur. kra²-se から, その共通形式として *gra- を設定した。これにはラフ・シ語 ká-vei, ラフ・ナ語 ká ká-lu, マル語 gjò-, ラシ語 gjó- が対応するから, この共通形式は信頼できる。これにあたるリス語の形は, beh dzàh-ʔah である。一見すれば, この単語は beh “話” と dzàh-ʔah “食べる” から出来ていて, “聞く” は “話を食べる” と表現され, リス語は表現の上で特別な形をとっているように考えられる。しかし, 実は共通形式 gr- : Lisu dz- は規則的な対応通則であることは, つぎの並行例からわかる。

“to fear”	Lisu dzu-ʔah :	Bur. krək-se
“thunderbolt”	mih dzùh :	mu ² kru ²
“floor”	dzòh-mah :	kram ²
“to melt”	dzùh du-ʔah :	kyu-se
“mosquito”	dzùh pýh :	khraŋ
“to be dry”	dzuh-ʔah :	khrok-se
(Lisu tsh- : Bur. khr-khy- は後述の例を見よ, p. 30)		

またリス語 -œ : Bur. -am, -um, -up にはつぎのような例がある。

“hair”	ʔúh tshœh :	tšham paŋ
“to smell”	noeh-ʔah :	nam-se
“to walk”	šœh je-ʔah :	khriy hlam ²
“to laugh”	vàh šœh-ʔah :	ray prum ² -se
“to use”	jœh-ʔah :	sum ² -se
“to wrap”	thœh-ʔah :	thup-se
“to sink”	lœh je-ʔah :	hmrup-se < hmlup-se
“to stir”	lœ-ʔah :	hlup-se

リス語は, このようにビス語やアカ語に比べるとかなり特別な音素形式に変えてはいるが, 共通形式をよく保存しているといえる。

つぎに比較の対象になるリス語の子音目録をまず掲げる。アカ語およびビス語, ビルマ語については, 「ビス語の系統」61ページにその子音目録をあげた。

stops	affricates	fricatives	nasals	lateral
k kh g ʔ		x ɣ h ĥ	ŋ	
p ph b		f v	m	
t th d	ts tsh dz	s z š j	n ñ	l
および子音音素結合 kj- khj- gj-				

この子音体系をもつリス語を他の3種の言葉と比較して、発見できる対応通則をつぎに例示する。

Rules of Phonemic Correspondence

Rule 1.

i) Bisu k- : Akha k- : Bur. k- : Lisu k-²¹⁾

さきに Bisu, Akha, Bur. の間で適用できた通則は、ここではそのまま認めることができない。対応例としてあげた2単語 “to stir” と “to bite” には、リス語のつぎの形式があたる。

“to stir”	Lisu	lœ-ʔah :	Bur. hlup-se
“to bite”		khò-ʔah :	kuuk-se

前者はさきの例 ku²-se とはまったくの異源形式であるが、後者のリス語形は、同源形式あるいは同源異語幹の形式と考えられ、ラフ語の形などを考慮すると、この形態素の分布はつぎのようになる。

“to bite”		*gʷuk-se(?)		*tšhat(?)
Bur.	k-	kuuk-se		?
Akha	k-	kò-fiʷ		×
Bisu	k-	kɔ-ŋɛ		tshê-ŋɛ
Lisu	kh-	khò-ʔah		×
Lahu Shi		×		tshêh-ve
Lahu Na	g-	gù-lu		×
				(cf. Tib. hcha-ba)

ラフ語から推測すると、この両形式の意味は、本来 *gʷuk “人にかみつく”，と *tšhat “物にかみつく”点で区別されたのであろう。これと類似した意味 “to chew” の形式は、つぎのようになる。

“to chew”	*g-wa ² -se		*ba ² -se
Lisu	guà ŋi-ʔah	Lahu Shi	béh-ve
Bur.	wa ² -se	Lahu Na	bè-lu
Maru	wɔ-		
Lashi	wò-		
Akha	ɣò-fiʷ	(cf. Kachin ka' wáa-ʔay “to bite”)	

この wa²-se はあるいは ba²-se と同源形式であって、*g-ba²-se にまとめるべきであるか

21) ここでは、ビス語あるいはアカ語の対応形をあげない場合があるが、前掲「ビス語の系統」を見られたい。

もわからない。

このほかの形態素について 1) Lisu k- : Bur. k-, 2) Lisu k- : Akha k-, 3) Lisu k- : Lahu k- の対応関係を見出すことができる。

- | | | | |
|-----------------|----------------|---------------------|----------------|
| 1) “body” | Lisu ko-dòh : | Bur. ku | |
| “to scratch” | kũh-ʔah : | kut-se | |
| “to cross over” | kuh-ʔah : | ku ² -se | |
| 2) “root” | Lisu sũh-kìh : | Akha dù-kí | |
| “neck” | kú-tsui : | kù bjòn | |
| 3) “to put in” | Lisu kuw-ɣuw : | Lahu Shi kèh-veh : | Lahu Na kúh-lu |
| “skin” | jíh ku-dzu : | ô ɣìh kũ : | ô ɣù kũ |
| “branch” | sũh làe káh : | ô-kǎ : | sũ kǎ |

(cf. “skin” Bisu ʔaŋ-kho : Akha ba-xo : Bur. a-khok, “branch” Bur. sac kuŋ, a-khok)

なお “root” には, *gih, *khjè < *khjat, *mrac の 3 共通形式があって, つぎの分布を示している。

	*gih	*khjè-	*mrac
Maru I	sák kyì	Bisu ʔaŋ-khjè-	Bur. mrac
Lashi	kyì	Lahu Shi ô tshĩh	Maru II sák mík
Akha	dù kí		(Kachin 'a'rũu)
Lisu	sũh kìh		
Lahu Na	sũ gu	(cf. Nung. gi, achi, Tib. rtsa-ba)	

ii) Bisu t- : Akha t- : Bur. t- : Lisu t-.

Bisu t- : Akha t- : Bur. t- : の対応を示した三つの形態素には, リス語のつぎの形式がある。

	Lisu	Bisu	Akha	Bur.
“one”	tíh-thèh	tu	ti	tac
“jaw”	dàŋ-tóh	mèn-təŋ	mè-tòn	×
“navel”	khjǎh-dùh	sa-tòŋ	tšha-tòn	khyak ×

これらはいずれも 同源形式であるが, ただ “navel” については, 少し説明が必要である。
 “臍” には *khyak と *toŋ の 2 形式があった。

	*khyak	*toŋ	
Maru	tšho	×	
Lashi	tšho	×	
Bur.	khyak	×	
Lisu	khjǎh	-dùh	
Akha	tšha	-tòn	
Bisu	sá	-tòŋ	
Lahu Shi	×	vú-tù	(cf. Tib. lte-ba
Lahu Na	×	vù-tù	Kachin sha'tày)

あとで述べる Rule 3 iv を考慮すると、歯茎閉鎖音にはつぎの四つの対応系列ができる。

	Lisu	Akha	Bur.	Lahu
a)	t- :	t- :	t- :	t-
b)	t- :	d- :	t- :	t-
c)	d- :	d- :	t- :	t-
d)	d- :	d- :	t- :	d-

したがって、この系列のどれにも属さないこのリス語の -dùh は例外的な形式で、本来は -tùh であるべきことがわかる。b) の対応例を、ここであげておく。

	Lisu	Akha	Bur.	Lahu Shi
“to kick”	tih-ʔah	di-fiw	ti²-se	×
“to spit”	tì-ʔah	dù-xà	tuy²-se	×
“poison”	tóh-ʔah	dò-bòn	a-tòk	tôh-ve

iii) 前稿では Bisu p- : Akha p- : Bur. p- の対応例を発見できなかったが、リス語・ラフ語・ビルマ語の間には 1) Lisu p- : Lahu p- : Bur. p- と 2) Lisu p- : Lahu p- : Bur. ph- の二つの関係を設定できる。

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
1) “to exchange”	pah-ʔah	páh-ve	pah-lu	prɔŋ²-se
“to carry on shoulder”	pýh-ʔah	pšh-ve	pù-lu	pu²-se
2) “frog”	vó-pá	páh	pàh-káh	pha²
“comb”	ʔúh-pšh	pí	×	phri²
“ears”	ná-poh	nàh-pš	nàh-pǒ	na²rwak < *phrwak

iv) Bisu ʔ- : Akha ʔ- : Bur. ʔ- : の関係を示した四つの単語は、リス語ではいずれも別の子音音素ではじまる。

“bottom”	jíh dóh	“to enter”	døh-ʔah
“egg”	ʔah ja fu	“guts”	jíh buh

はじめの2例が異源形式であることは、jíh dóh がアカ語 dà-ʔo の dà に対応する事実から明瞭である。しかし、あとの2例は、その単語構成から言っても、同源形式であることに間違いがない。“guts” “egg” の形態素の分布はつぎのようになる。

	“guts”	“egg”
Lahu Shi	ô-gû	ɣǎ ɣùh
Lahu Na	ô fu kù	ɣâ ʔu
Lisu	jíh bu	ʔah ja fu
Bur.	u	krak u ³
Maru	áo	ào
Lashi	û	kjǒ ù
Akha	bò-ʔú	ja-ʔu
Bisu	ʔaŋ-ʔú	hja-ʔu

Bur., Maru, Lashi, Akha, Bisu はいずれも ʔu 形式であるのに対して、Lahu Shi, Lahu Na, Lisu では別の子音音素にはじまり、その子音の性格に階程があるように考えられる。

	Lahu Shi	Lisu	Lahu Na	Bur.
“guts”	gu	bu	fu	ʔu
“egg”	ɣu	fu	ʔu	ʔu

なお Lisu ʔ- : Bur. ʔ- の関係が成りたつ例も少数はある。

	Lisu	Bur.	Lisu	Bur.
“head”	ʔúh-dýh :	ʔu ²	“to crack”	ʔe-ʔah : ʔak-se

Rule 2.

i) Lisu kh- : Bisu kh- : Akha kh- : Bur. kh- : (Lahu kh-)

Bisu kh- : Akha kh- : Bur. kh- の関係をもつ三つの単語は、リス語では“dog”のみが kh- であり、他の二つには tsh- があたる。この tsh- はビルマ語の khr- に応じる形であり、

リス語では kh- のあとの -r- が脱落しなかったことを意味する。²²⁾

	Lisu	Bisu	Akha	Bur.
“dog”	khùh	khù	?a-khù	khuy ²
“foot”	tshùh pjah	là khù	?a-khú	khriy
“thread”	tshuh zà	khúŋ	khón	khrañ

リス語の khr- の保存という特徴は、ラフ語とも一致せず、ビルマ語とのみ並行する。

	Lahu Shi	Lahu Na
“foot”	khíh	khúh
“thread”	γû khèh	γû khèh

このほか Lisu kh- : Bur. kh- にはつぎの形態素がある。

“hole”	Lisu khù	Bur. ?a-khoŋ ²
“to cut”	khù-?ah	khut-se
“to call”	khuh-?ah	khó-se
“year”	khò	khu ³ (Akha khú-flu)
“basket”	khă thu	Akha xà khá

ii) Lisu ph- : Bisu ph- : Akha ph- : Bur. ph- : (Lahu ph-)

Bisu ph- : Akha ph- : Bur. ph- の対応通則は、リス語にも適用できる。

	Lisu	Bisu	Akha	Bur.
“leaf”	sùh phæ	?aŋ-phà	?a-pha	phak
“to open”	phu-?ah	phoŋ-ŋe	phon-flu	phwaŋ ² -se
“grandfather”	?ah-pháh	?a-phi	?a-phi	?a-phwa ²

この通則は、さらにラフ語にも適用できる。

	Lahu Shi	Lahu Na
“leaf”	ô-phâ	sû phâ
“to open”	phoh-ve	phoh-lu

22) リス語の “dog” は ?ah-nàh であるが、十二支にのこる同源形 khùh を用いる。これには、Lahu Shi phí, Lahu Na phù があたる。すなわち “dog” には、khui と phu の二つの形式があった。kh- と ph- の交替には、並行例がある。ビルマ語で “foot” khriy に対して、“sandal” は phi-nap という。この複合形式に認められる phi- は、リス語・ラフ語の構成法から類推して、“足”の別形式に違いない。“foot” “sandal” “dog” の分布を表にすると、つぎのようになる。

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Akha	Bur.
“foot”	tshuh-phăh	khíh	khúh	?a-khú	khriy
“sandal”	tshuh-ñi	khíh-nũ	khúh-nò	sè-nó	phi-nap
“dog”	khùh	phíh	phùh	?a-khùh	khriy ²

このほかつぎの対応例がある。

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Akha	Bur.
“to vomit”	phè-ʔah	phêh-ve	phîh-ve	phè-fiw	phat-se
“white”	phuh	phuh	phuh	phjú	phru

iii) Lisu th- : Bisu th- : Akha th- : Bur. th- (Lahu th-)

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
“to be thick”	thuh-ʔah	thùh-ve	thúh-ah	thu-se
“upon”	thà	ô-thâ	ô-thâ	a-thak
“when”	ʔa-li-thæ	khà thá	khà thá	×

“to rise” には、三つの共通形式があった。

	Bisu	Bur.	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Akha
*tha-	tha-ŋɛ	tha-se	×	×	×	×
*tu-	×	×	tu-ʔah	tuh-ve	tuh-lu	×
*thu-	×	×	×	×	×	thu-fiw

“one thousand” Lisu thèh tu, Bur. ta-thoŋ はこれに並行する例であろうか。(Lahu Na ti phan, Akha ti phá はいずれもタイ語 phan : N. TH. pan からの借用形式である)

Lisu th- : Bur. th- には、つぎの諸例がある。

	Lisu	Bur.	Akha
“to trap”	ua thuh-ʔah	thoŋ-se	(thón-fiw)
“to thrust at”	thõh-ʔah	thw²-se	
“to be sharp”	thæ-ʔah	thak-se	(da tšhé)
“knife”	ʔa-thàh	tha² > da²	

Rule 3

i) Lisu k- : Bisu k- : Akha g- : Bur. k-

	Lisu	Bisu	Akha	Bur.
“star”	ku-zà	ʔù-kù	ʔa-gú	kray
“to play”	kăh ñh-ʔah	×	ni-ga-fiw	ka tša²-se
“nine”	kúh	×	gòè	kw²

Lisu dz- : Bisu k- : Akha g- : Bur. kr- khr- についてはさきに述べた(p.17)。

ii) Lisu g- : Bisu ? : Akha ? : Bur. kh-

“coffin”	Lisu	gu	Bur. khoŋ²
“spoon”		zǔh-gù	yok khju
“friend”		gua tshòh	suŋay khyaq²
“song”		mòh guà	si khyaq²
Lisu g- : Bisu? : Akha x- : Bur. k?			
“hook”	Lisu	jǐh gòh	Akha jè xò (Bur. kòk)
“forehead”		na- gà	na-xó

iii a) Lisu b- : Bisu p- : Akha b- : Bur. p- (Lahu p-)²³)

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
“cheek”	bàh-buh	pàh lõ	×	pa²
“to be thin”	bàh-ʔah	páh-ve	páh-a	pa²-se
“to be old”	jǐh bè	ô-pìh	ô-pìh	×
“moon”	hah-bah	hàh-páh	hàh-páh	×
“ant”	bòh loh	pìh ǵǵ	pùh ǵǵ	parwak-
“taro”	bì	peh sĩ	peh sì	prin
“bee”	biàh	a péh	pèh	pya²

iii b) Lisu b- : Bisu p- : Akha b- : Bur. p- (Lahu b-)

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
“to be full”	bíh-ʔah	bih-ve	bih-lu	prañ³-se
“pus”	bih khúh	×	béh ǵùh	prañ
“to write”	boh-ʔah	bǵ-ve	×	×
“to shoot”	bǵ-ʔah	bǵ-ve	bǵ-lu	puw³-se

Bisu p- : Akha b- : Bur. p- の通則には, Lisu b- を加えることができるが, ラフ語の対応形にしたがって, iii a), iii b) の二つの subrules を考えねばならない。

iv) Bisu t- : Akha d- : Bur. t- の通則には Lisu d- を加えることができるが, これもラフ語の対応形にしたがって, 二つの subrules を設定する。

23) “to give” *biy- に対するリス語 gùh-ʔah は特別の対応形であり, ほかに並行例がない。リス語に bùh-ʔah > gùh-ʔah の変化があったと考えるよりほかはない。

iv a) Lisu d- : Bisu t- : Akha d- : Bur. t- (Lahu t-)

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
“wing”	dỳh-làe	tòh lâ	tùh lâ	tɔŋ
“head”	ʔúh-dỳh	×	ʔa tù kùh	×
“to go out”	doh-jé-ʔah	tǎ-e-ve	tǎ-i-lu	thwak-se

iv b) Lisu d- : Bisu t- : Akha d- : Bur. t- (Lahu d-)

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
“to dig”	dỳh-ʔah	dúh-ve	duh-lu	tu ² -se
“to wear”	dòeh-ʔah	dèh-ve	déh-lu	×
“to drink”	do-ʔah	dòh-ve	dòh-lu	×

なお Lisu d- : Akha d- の対応例はこのほかにもある。

	Lisu	Akha		Lisu	Akha
“rice-field”	de-mi	de ʔi-já	“body”	ko-dèh	mo-do
“to sever”	du-ʔah	dx-tshe	“bottom”	jǐh dó	dà-ʔo

Rule 4, Rule 8.

Rule 4 および Rule 8 の弁別はビス語の対応形が stops であるか nasals であるかによった。このビス語の対応形を考慮外におくと、リス語もラフ語も Rule 4, 8 共に同じ形で対応する。

i) Lisu ŋ- : Bisu g- ŋ- : Akha ŋ- : Bur. ŋ- (Lahu ŋ-)

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
“I”	ŋua	ŋâh	ŋâh	ŋa
“fish”	ŋuá	ŋáh	ŋáh	ŋa ²
“to borrow”	ŋua-ʔah	ŋàh-ve	ŋàh-lu	hŋa ² -se
“five”	ŋuà	ŋáh-màh	ŋáh-màh	ŋa ²

明らかに同源形式と考えられるが Lisu ŋ- : Lahu h- の対応を示す例が一つある。

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
“to cry”	ŋuh-ʔah	hòh-ve	hòh-lu	ŋur-se

ii) Lisu m- : Bisu b- m- : Akha m- : Bur. m- (Lahu m-)

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
“to be hungry”	mù-ʔah	mê-ve	mù-lu	mwat-se
“eye”	mia	mě sìh	mê-sìh	myak-tǎi

"grass"	mò	mǎ	m̃	mrak
"horse"	ʔah-mòh	mǎh	jǐ m̃h	mraŋ²
"old person"	tshoh mòh	tshòh móm	tshóh mòh	ʔu maŋ²

リス語の "fire" ʔah-tóh は特殊な形式であるが、ビス語 bì-thó のあとの形態素と対応する。"fire" mí の分布はつぎのようである。

Lahu Shi	ʔa-míh	Maru	mí	Bisu	bì thó
Lahu Na	ʔa-mih	Lashi	mí	Tib.	me
Bur.	mi²	Akha	mì dzà	Nyilolo	m̃ 11

"mother" Lisu máh-ma は、Bisu ʔaŋ-ba, Akha ʔa-ma と対応して、Bur. ʔa-mi³ とは同源異語幹形式である。Lahu Shi ʔà zéh, Lahu Na ʔà tẽ はどれとも対応しない。

iii) Lisu n- ñ- : Bisu d- n- : Akha n- : Bur. n- hn- (Lahu n-)

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
"to be sick"	nah-ʔah	nâh-ve	nâh lu	na-se
"to be soft"	nùh-ʔah	núh-ve	nuh-a	nu³-se
"to be black"	ne-ʔah	nă-ve	nă-è-ve	nak-se
"thou"	nuh	nôh	nôh	naŋ
"to be near"	nèh-ʔah	×	néh-a	ni²-se
"heart"	ñih-ma	nih ma sĩ	nih ma si	hnac

Bisu hn- について設定した subrule iii b) および iv) Bisu hñ- : Akha n- : Bur. ñ- はリス語では意味をもたない。

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
"day"	ñih	ô nih	nih	ne³ < niy³
"to listen"	na năh-ʔah	náh-ve	náh-lu	na²-se
"finger"	læ ñi	lâ nêh	lâ nóh	lak ñu²
"younger brother"	ñih-zà	(á năh)	nih-pà-e	ñi

しかし、v) Lisu ñ- : Bisu hñ- : Akha ñ- : Bur. n- hŋ- : Lahu ŋ- が成立する。

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Bur.
"to be short"	ñýh-ñýh-ʔah	ŋèh-ve	ŋéh-ah	nim²-se
"bird"	ñæ	ŋă	ŋă	hŋak

なお "to sit" Lisu ñih-tá, Akha nŋ-fiw に対する Lahu Shi míh-ve, Lahu Na muh-lu は異源形式であろう。

Rule 5

Bisu k- : Akha ɣ- : Bur. ʔ- にあたるリス語形は v- である。

	Lisu	Bisu	Akha	Bur.
“needle”	vò	láj ko	là ɣo	khyup ʔap

これにはラフ語 ɣ- が対応する。

	Lahu Shi	Lahu Na	Akha	Bur.
“needle”	ʔa ɣô	ɣũ	ʔa-ɣò	ʔap
“to win”	ɣáh-ve	ɣàh-lu	ɣà-fiw	×
“strength”	ô-ɣáh	ô-ɣàh	ɣà	ʔa²

“door” Lisu ʔa-khùh は Bur. tam kha² (cf. Tib. sgo) とは同源形式であるが, Bisu láj-ko, Akha là-ɣo とは異語幹形式らしい。

Rule 5b として, つぎの対応例から, Lisu ɣ- : Akha ɣ- : Bur. r- を設定できる。

	Lisu	Akha	Bur.
“to pull”	ɣòh lah-ʔah	ɣɛ-fiw	run²-se
“to collect”	ɣo-ʔah	ɣó-fiw	rum²-se
“to shake”	ɣõ ñe-ʔah	ɣɛ ñe-fiw	×
“to chew”	ɣu-ʔah	ɣò-fiw	×

なお, そのほか Lisu ɣ- : Akha fi- も少数ながら認められる。

“verb suffix”	-ɣuh	-fiw
“spider”	ʔah-ɣa ma	ʔa-fio lo-ma

Rule 6

Bisu kh- : Akha x- : Bur. kh- には Lisu kh- を加えることができる。(Lahu kh-)

	Lisu	Lahu Shi	Lahu Na	Akha
“to be bitter”	khùà-ʔah	kháh-ve	kháh-a	jo-xà
“smoke”	mùh-khùh	mǎh-khóh	ṛṛ khóh	ʔù xòè
“to steal”	khùh-ʔah	khóh-ve	khòh-lu	xòè-fiw

Rule 7.

Bisu g- : Akha j- : Bur. r- には Lisu v- があたる。

	Lisu	Bisu	Akha	Bur.
“bone”	jíh vùh tó	ʔaŋ-gàw	šà jòè	ru²

このほか Lisu v- : Akha ʔ- ɣ- : Bur. r- の対応関係が、つぎの諸例で成立する。

	Lisu	Akha	Bur.	Lahu Shi
“to sell”	vu-ʔah	ʔò-fiur	rɔŋ²-se	hóh-ve
“to laugh”	vàh-šœh-ʔah	ʔú-fiur	ray-se	ɣîh-ve
“water”	-vùh-	ʔú-	riy	-ɣîh
“to count”	vyh-ñe-ʔah	ɣú-fiur	riy-se	ɣoh-ve

Rule 9.

1) Lisu ĥ- : Akha j- l- ñ- : Bur. r- l- (Lahu z- h- l-)

2) Lisu h- : Akha j- : Bur. hr- hl- (Lahu h- ɣ- tš-)

の対応関係が成立する。

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
1) “house”	ĥih	ñm	zêh	im<rim?
“rain”	mùh ĥah	ʔù-jé	mǎh zêh	mu² rwa
“to stand up”	ĥeh lah-ʔah		hǒ-ve	rap-se
“wind”	mùh ĥih	džà lé	mǎh-hòh	liy
“one hundred”	thèh ĥia	ti já	tèh hàh	ta rya
“to wait for”	ĥuh ñe-ʔah	Bisu hlo-ŋe	loh-ve	laŋ³-se
2) “eight”	hè	je	hǐ-mah	hrac
“moon”	hah bah	bàla	hàh páh	la < hla?
“to seek”	huá-ʔah	×	tsah-ve	hra-se
“to breathe”	sàe hǎh-ʔah	×	sǎ ɣoh-ve	asak hru

リス語 ĥ- は、ビルマ語の l- または r- に対応し、h- は hr- hl- にあたる。それゆえ、ビルマ語 “house” ʔim は *rim から (Tib. khyim < khrim?), “moon” la は *hla から来源したと考えられる (cf. Tib. zla-ba)。また、リス語 “good” xah-ʔah は、ビルマ語 hla-se に対応して、本来 hah-ʔah が正しい形であろう。これらにあたるアカ語、ラフ語は統一的な形をもっていない。

Rule 10.

i) Lisu ts- : Bisu ts- tsh- : Akha ts- tsh- : Bur. tšh- (Lahu ts- tsh-)

	Lisu	Lahu Shi	Bisu	Bur.
“to cough”	tsi-ʔah	tsǎh-ve	tshàw-ŋe	tšhu²-se
“medicine”	næh tsù	nǎ tshǎh	tsù kà	tšhiy²
“wrist”	lè tsu	lâ kóh tsǎh	la tshù	lak-tšhac

この無気音と出気音の対応は明瞭ではない。(Akha là-tsur “wrist”)

ii) Lisu dz- : Bisu ts- : Akha dz- : Bur. tš- (Lahu ts-)

Bisu ts- : Akha dz- : Bur. tš- には, リス語 dz- (ラフ語 ts-) を加えることができる。

	Lisu	Lahu Shi	Akha	Bur.
“to eat”	dzàh-ʔah	tsáh-ve	dzà-fiw	tša ² -se
“to ride”	dzù-ʔah	tsíh-ve	×	tši ² -se
“to pierce”	dzù-ʔah	×	(tsò-fiw)	tšu ² -se
“plant”	dzah	tsáh	×	tša ³ -pa ²
“to have”	dzoh-ʔah	tsôh-ve	džó-fiw	×

そのほか “thorn” Lisu jǐh kǔh dzuh : Lahu Shi à-tshúh : Bur. tšhu²-paŋ のリス語形は, もともとは tshuh であろう。

iii) Lisu tsh- : Bisu tsh- : Akha tsh- : Bur. tšh- (Lahu tsh-)

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
“earth”	mih-tshah	mí-tshà	×	×
“mortar”	tshúh khúh	thòn tshín	tshèh-má	tšhum
“person”	làh tshóh	tshó-hà	tshòh	×

iv) Lisu khj- tsh- : Bisu tsh- : Akha ts- : Bur. tšh (Lahu tsh-)

	Lisu	Akha ²⁴⁾	Lahu Shi	Bur.
“deer”	khjeh	tse	tshěh	tšhat
“to speak”	khjèh-ʔah	×	×	tšhu ² -se
“to join”	tsháh-ɣuh	tshà-fiw	tshôh-ve	tšhak-se
“goat”	áh-tshì	(ki-)	àh tshih	tshit

Rule 11.

「ビス語の系統」では Rule 11 i) および ii) を, ビス語の対応形が khj- であるか tšh- かによって分けた。リス語を中心とした場合, この区別は, とくに意味をもたない。

i) Lisu kj- : Akha kh-, tšh- : Bur. khy- (Lahu k- ts-)

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
“fence”	bœh kjœ	jà-khm	koh	khram
“to be sour”	kjyh-ʔah	jo-tšhé	tseh-ve	khyañ-se

24) アカ語は “deer” に tse と tshí の 2 形式があるが, 母音の対応関係からみると, tse のほうが正しいと考えられる。

“to boil”	kjah-ʔah	×	tsàh-ve	khyak-se
“blind”	mia kjòe	×	mě tsũ	×

ii a) Lisu khj- : Akha kh- tšh- : Bur. khy- (Lahu kh- tsh-)

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
“navel”	khjǎ dùh	tšha tòh	×	khyak
“excrement”	khjì	do khì	ô khéh	khiy ²
“to weigh”	khje-ñi-ʔah	×	tshǝh-ve	khyar ³ -se
“to be sharp”	khjǝ-ʔah	jo-tšhé	tshǝ-ve	khywan ³ -se
“cross bow”	khjǎh	(ka)	khǎ	×

ii b) Lisu tsh- : Akha tšh- : Bur. khy- (Lahu kh- tsh-)

“to be sweet”	tshih-ʔah	jo-tšhóe	tshǝh-ve	khyu-se
“six”	tshò	(ko)	khǝ-màh	khrok
“horn”	jǐh ʔúh tshu	ʔù tšhóe	ô khǝ	u ² khyu

iii) Lisu gj- : Lahu Shi k- : Lahu Na k-

“water”	jih gja	à ká	ji kǎ
---------	---------	------	-------

最後の例は, Bisu, Akha, Bur. ともに対応形をもたない。

Rule 12.

i) Bisu s- : Akha s- : Bur. s- には Lisu s- (Lahu s-) を

ii) Bisu š- : Akha š- : Bur. s- には Lisu š- (Lahu s-) を加えることができる。

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
i) “tooth”	sùh-tshu	sǝ	×	swa ²
“nail”	lǎe sèh	la sǝŋ	lâ sǝh kǔ	lak sañ ²
“fruit”	sú-sùh	ʔa-sì	ô-síh	a-si ²
“to kill”	seh-ʔah	sè-fiur	×	sat-se
“voice”	jǐh-sǎe	the sá	×	a-sam
ii) “blood”	jǐh-šì	šì	ô-sǝh	suy ²
“to die”	ši-ʔah	ší-fiur	sǝh-ve	siy-se
“new”	jǐh šì	jo-šù	ô-sǝ	sac

そのほか iii) Lisu x- : Bisu š- : Akha š- : Bur. s- (Lahu s-) がある。

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
“flesh”	jíh xùà	šà dží	ô-sáh	a-sa ²
“iron”	xo	šm	soh	sam

Rule 13.

i) Bisu j- : Akha j- : Bur. y- には, Lisu z- j- (Lahu z-) があたる。

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
“to take”	zu tǎh-ʔah	jú-fiu	zûh-ve	yu-se
“to sleep”	jìh-tá	ju-fiu	zê-ve	ʔip-se < yip

Lisu “to take” zu- は, もともと *ju- であろう。

ii) Bisu w- : Akha z- j-: Bur. w- には, Lisu v- があたる。(Lahu v-)

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
“pig”	ʔah-vè	ʔa-za	vâ	wak
“to buy”	vu-ʔah	zú-fiu	vîh-ve	way-se
“clothes”	vih tshì	×	vî káh	a-wat
“flower”	sũh wèh	a bó je	sě vě	×

なお iii) Lisu γ- : Bisu v-: Bur. w- (Lahu v-) の対応関係がつぎの例に見られる。

	Lisu	Bisu	Lahu Shi	Bur.
iii) “to be far”	γùh-ʔah	vê-ŋe	vîh-ve	wiy ² -se
“left hand”	lǎe γúh	×	×	lak way ²

Rule 14.

i) Bisu j- : Akha z- : Bur. s- には, Lisu z- (Lahu z-) があたる。

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
“child”	zàh	zà	tshòh záh	sa ²
“sheep”	ʔah-zoh	×	zòh-ě	su ²
“pillar”	zu khu	xò-zš	×	×
“to use”	jòeh-ʔah	zm-fiu	zéh-ve	sum ² -se

つぎの2例もこれに属するのであろうか。

“urine” ²⁵⁾	zù thy	ʔí-šù	zšh-γîh	siy ²
“wine”	zuuh-phšh	dži bà	zšh	siy

25) この “urine” は, 前稿では rule 13 に入れた。

ii) Bisu hj- : Akha j- : Bur. tšh- には, Lisu h- (Lahu z-) があたる。

“elephant” ha-ma jà-ma zàh-mah tšhaŋ²

さきに掲げた “to fish” はリス語では別の形態素 mià-ʔah が使われ, これはビルマ語 hmya²-se に対応する。

Rule 15.

Bisu hj- : Akha j- : Bur. kr- y- とした形態素には, リス語 j- が対応する。

	Lisu	Bisu	Bur.	Lahu Shi
“hen”	ʔa-jáh ma	hja	krak	ɣǎ-màh
“right hand”	læ ja	(là hmà)	lak-ya	lâ-sàh

(cf. “field” Bisu hjá : Akha já : Lahu Shi hah : Bur. ya)

つぎの Lisu ɣ- : Bur. y- の対応をもつ単語は異源形式であろうか。²⁶⁾

	Lisu	Bur.	Lahu Shi	Bisu
“to fan”	ɣèh-ʔah	yab-se	phéh-ve	pjáŋ-ŋe
“fan”	ɣèh-duh	yab toŋ	phéh tùh	pjáŋ wi

ii) Lisu h- ʔ- : Bisu h- : Akha h- : Bur kr- khr- にはつぎの例がある。

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
“rat”	ʔa-hǎh	ho-tšà	fǎ tshàh	krwak
“to wither”	hòh-ʔah	×	ɣu-ve	khrok-se
“to be big”	ʔùh-ʔah	jo-huì	ʔih-ve	kri ² -se

ラフ語 “rat” fǎ- は *hwa > f- である。

Rule 16.

i) Bisu l- : Akha l- : Bur. l- および ii) Bisu hl- : Akha l- : Bur. hl- には Lisu l- (Lahu l-) を追加できる。

	Lisu	Bisu	Lahu Shi	Bur.
i) “hand”	læ phǎh	là lùŋ	lâ kóh	lak
“to come”	lah-ʔah	lá-ŋe	lâh-ve	la-se
ii) “to warm”	lœh-ʔah	hlóŋ-ŋe	lêh-ve	hlum-se
“tongue”	lah tšhoe	mèn hlà	hàh líh	hlyà

26) “fan” Bur. yap は Tib. yab-mo とよく対応するのに, 何故ロロ・ビルマ語系の言葉でさまざまな音素形式をとるのかわからない。そのほか Akha bo-ʔu, Lahu Na phúh tùh がある。

そのほか Lisu l- : Bur. l- につぎの対応例がある。

“to be light (not heavy)”	Lisu lòh-ʔah :	Bur. laŋ ² -se
“to be heavy”	lih-ʔah :	liy ² -se
“to be enough”	löh-ʔah :	lök-se
“boat”	tšuh-lĩh :	hliy
“to stir”	lœ-ʔah :	hlup-se
“to lick”	lù-ʔah :	lyak-se
“bow”	loh-pǎh :	laŋ ² liy ²

Rule 17.

Bisu l- : Akha l- : Bur. Cl- にも Lisu l- があたる (Lahu l- h-)。

	Lisu	Akha	Lahu Shi	Bur.
“tiger”	làh-ma	xà là	láh (Lahu Na)	kya ² < kla ²
“stone”	lòh dih páh	xà lo	hoh-mèh	kyok < klök
“grandson”	líh-pa	ʔa-lí	ô-hò-ɛ	mriy ² < mliy ²

以上、「ビス語の系統」において提出したビス語, アカ語, ビルマ語の親属関係を証明する rule 1 から 17 にしたがって, リス語の対応形式を求めた。その結果, リス語については, rule 4 と 8 の区別が無意味になり, そのほかの rules には, いくつかの subrules を認めることになった。また “snake” のように, さきにあげた対応関係が誤りであることがわかる例も出てきた。Rule 17 の中で Bisu ʔu-lán, Akha a-lo, Bur. mluy としたのは実は誤りで, ビルマ語形 mluy はビス語とアカ語に共通する lán に対応するのではなくて, ビス語の ʔu にあたるものがリス語およびラフ語形を比較することによって明らかになった。この関係を書き改めると, つぎのようになる。

Bisu	ʔu-lán	
Akha	ʔa-lo	
Bur.	mluy	
Lisu	fuh	
Lahu Shi	vĩh	
Lahu Na	vũh	(cf. Tib. sbrul, Kachin la'pùu)

リス語の fuh, ラフ語の vĩh~vũh はビルマ語の -luy (Tib. -rul) に対応する。リス語 f- は hw- よりの変化形であり, h- は共通形式 Cl- に対する規則形であるから, リス語の fuh が Bur. mluy に対応することは十分証明できる。(cf. Rule 9. 2 および上掲 “rat”, “to release”

Lisu fu-ʔah : Bur. hlwat-se 参照)。

ここで、リス語の子音の性格を総括的に考察しよう。対応通則 1—17 の中で、もっとも重要な点は、voiceless : voiced の対応と、unaspirated : aspirated の対応である。前者の関係では、リス語が、ビス語ともアカ語とももちろんビルマ語とも違った性格をもっている。

この四つの言葉の間の対応関係は、stops と affricates の子音について、つぎのようになるのが原則である。

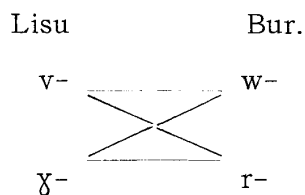
Lisu		Bisu		Akha		Bur.
1) voiceless	:	voiceless	:	voiceless	:	voiceless
2) voiceless	:	voiceless	:	voiced	:	voiceless
3) voiced	:	voiceless	:	voiced	:	voiceless

前稿で、私は 1) の共通形式に voiceless を、2) 3) には voiced を設定した。この設定を訂正する必要はないが、リス語において 2) と 3) に分裂する条件、換言すると、リス語で voiced から voiceless への変化が、一部の形態素でおこった条件はいまはわからない。そのうえ、ラフ語形を考慮すると、3 はさらに 2 分化される。これらの問題は、ここで対象とした言葉のみでは解決できないし、対象を拡げると、問題はもっと複雑になるであろう。

無気音と出気音の対立は、リス語の kj- と affricate ts- tsh- で混同がおこるほかは、一般によく保たれている。(cf. Rule 11)

リス語には、ビス語やアカ語がもたない変化の特徴が二、三ある。まず l- にはじまる形式は、リス語で i) l- > l-, ii) l- > h- の二つに分化した。後者は、hl- hr- > h- と並行する有声音の系列である。これと類似する現象がラフ語にもおこっており、リス語ラフ語を、アカ語ビス語と別の subgroup とする根拠の一つになる。(cf. Rule 9 および 16)

いま一つの特徴として、リス語 ɣ-v- をとりあげよう。これは、ビルマ語 r- w- とつぎの関係になる。リス語の v- はビルマ語の w- と r- と対応し、ビルマ語の w- は、リス語の v- と ɣ- と対応する。リス語の ɣ-, ビルマ語の r- も同様である。これらの対応例の初頭音はおそらく一つの共通形式で代表できるであろう。これに一例 “needle” Lisu vo : Bur. ʔap が加わる。しかし、“針” はもともと *rap であったことは、口語との対応から証明できる。



	“針”	“家”	“骨”	“喉”	“得る”
Nyilolo	ɣʂ 22	ɣʂ 22	ɣw 11	læ 33 ɣw 11	ɣa 22
Ahilolo	o 44	o 44	ɣ 11	lɛ 22 ɣ 21	o 44

Bur.	ʔap < *rap	ʔim < *rim	a-ruw ²	lañ-khrɔŋ	ra ³
Tib.	khab	khyim	rus		

リス語やロロ語のように形態素形式が短い言葉では、対応関係の並行性を求めることは極めてむづかしい。それだけに、このようによく並行する関係を示す形態素は、より大きい証明力をもつことになる。

共通態の子音音素結合は、リス語では、つぎにあげる四つのタイプのいずれかになる。

- 1) 副次音を保存する。*ky-, pr-, khy-, by-, my-, hmy-, ry-
- 2) 音素結合が affricate に変わる。*khr-, gr-
- 3) 主核音を脱落させて、副次音を主核音とする。*kl-, ml-
- 4) 副次音を脱落させる。*kr-, phl-, phr-, bl-, br-, mr-, ly-, hly-

- 例 1) 上掲 *ky- > kj- “to fall”, *pr- > pj- “to show”, *khy- > khj- “navel”, *by- > bi- “bee”, *my- > mi- “many” a-mya² > a-miàh, *hmy- > mi “to fish”, *ry- > hi- “hundred”
- 2) *khr- > tsh- “foot”, *gr- > dz- “to hear”
- 3) *kl- > l- “tiger”, *ml- > l- “grandchild”
- 4) *kr- > k- “star”, *phl- > ph- “white”, *phr- > ph- “to untie”, *bl- > b- “taro”, *br- > b- “to be full”, *mr- > m- “to be high” mraŋ³-se > mo-ʔah, *ly- > l- “to lick”, *hly- < l- “tongue”

*py-, *pl-, *khl-, *phy-, *hml-, *hmr- のリス語の対応形は不明である。

私は、前稿においてたてたこれらの Rules の指標形式とそれから推定した共通態の子音体系を、今の段階で改める必要があるとは思わない。リス語もビス語・アカ語・ビルマ語（そしてラフ語）と同じ共通態の体系から来源したものと考えている。そして、以上の比較研究によって、リス語の子音形式の来源形がいちおう明らかになったが、ここに提示した例は、リス語の単語全体の中の一部であって、なお来源のわからない形態素が多くのことっていることも付け加えておきたい。それらがいかなる性格をもつものであるかはあとの章において再び述べてみる。